喜多哲正

著者略歴

昭和12年熊本県天草に生れる。早稲田大学卒。全日本海運労働組合連合会に勤務。現在同連合会書記長。「影の怯え」で第86回芥川賞候補となる。

影の怯え

昭和六十年三月十日　第一刷

定価一三〇〇円

著者　喜多哲正

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話　東京（二六五）一二一一

郵便番号　一〇二

印刷　精興社

製本　中島製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Tetsumasa Kita 1985　Printed in Japan

《影の怯え》目次

優しかった時　5
影の怯え　55
追憶の囁き　121
グリーンヒルの坂で　175
あとがき　251

装幀　粟屋充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

影の怯え

優しかつた時

その日、私は数学のテストが、まるっきりできなかった。そのテストで、合格点を取れなければ、高校を卒業できないはずだった。それはわかっていながら、テストはなにひとつできなかった。無理なかったのである。数学の授業に、ただの一度も出席した覚えがなかったし、第一教科書さえも見たことがなかった。それでも、なぜ数学の授業に出なかったのか、どうして教科書を持っていないのか、まるでわからなかった。

そのとき、私にあったのは、ひどく恥かしい危惧だった。高校を卒業できなければ、人並に扱って貰えない、今時中学卒業など何人もいない、こんな不安で青くなっていたのである。学友たちはどうしていたのか、それもわからなかった。なぜかあたりには誰もいず、私は独りぽつんと取り残されていた。それでいて、どこからともなく、嘲笑うような笑い声が、聞えていた。

ふと、私は家に帰りたくなった。こんなとき、やはり親身に相談できる相手は、両親しかあるまいと思いついたのだ。帰り道は急な坂になっていて、ひどく歩きづらかった。途中に穴があり、そこをくぐらなければ家に辿りつけない、と私は考えつづけた。穴の入口はひどく小さく、肩口

までしか入らない。それもわかっていたが、なんとしても穴をくぐらなければならなかった。ところが、穴に行き着く手前で、山道はとつぜん小川にかわり、渡っていくうちに、水嵩がどんどん増した。すると、すぐ目の前にあったはずの向う岸が、見る間に遠のいていった。私は思わず叫ぼうとしたが、どうしても声がでなかった。

そして、そのとき自分のうなされている声で目がさめた。一週間前も、さらに一月ほど前も似たような夢を見た。こまかなところはちがっているが、数学のテストができなくて途方にくれているのと、それがどうやら私の身の上にとって大変な事態らしいというのは同じだった。その上、暫くあとで、両親に相談しなければと焦りながら、ついに会えないのまで似ていた。しかもきまって、そのときの私は、独り取り残され、誰からともなく嘲笑われている高校生だった。

たしかに、私が高校の頃、数学に悩まされたのは事実である。数学が不得手だったばかりか、父の存在が私を苦しめた。父は同じ高校で、まだ旧制中学の当時、かなり長い間数学の教師だった。そのせいか、私の教師のほとんどが父の教え子で、私は彼等からしばしばこんな風に辱しめを受けたものだ。

「君のお父さんは実に教育熱心な先生だった。この解き方も君のお父さんに教わったものだよ」

今でも、そのときの教師が、からかい気味に浮かべた皮肉な笑いを忘れないでいる。

だが、それはずっと昔の、今となっては懐かしいとさえいえる、淡い思い出にすぎなかった。このところくり返し現われる息苦しい夢は、そんな他愛ない追憶とはちがっている。いわば始終念頭にあって、普段はできるだけ忘れようと心掛け、そのためにかえって追いつめられ、ついには夢にうなされているにちがいなかった。ひどくありふれた日常の、心配事からきていたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

私がこうした夢を見るのは、きまって休みの日の、それも昼寝のときだった。夢を見たあとでは、たいてい四、五歳にもなった女の子が、聞き分けなくぐずりながら泣きわめく幻聴に悩まされた。その泣き声は、いつもある記憶に結びついた。幾時間も泣きつづける長女直子のかたわらで、どうしたらいいかわからず怯えて立ちつくす妻の姿である。すると、私は急に現実にひきもどされ、あわてて時計をさがした。時計は、不思議なほどいつも、五時から六時の間を指していた。私は落着きを失い、私の部屋と踊り場をへだてた娘たちの部屋をのぞく。次女の安子が机にむかっている姿しか見えない。もうそれだけで、お姉さんはどうしたんだ、と聞き出す気力もなくなるのだった。長女の直子は、階下の居間で、ぼかんとテレビを見ながら、幼稚に笑っているにちがいなかったのである。

私は夏休み以来、数週間おきに娘たちと、ひとつの約束を取り交すようになっていた。いつも内容はきまっていて、勉強時間をいつからいつまでとする、というものだった。ただその時間帯が少しずつかわっていっただけである。傍から見れば滑稽とも思えるこの約束を決めるのに、私は実に真面目だった。数時間にもわたって娘たちと話し合い、ときにはむきになっていい争った。話がまとまると、必ずお父さんとの約束と題して誓約書に似たものを出させた。私の机には、それがすでに五、六枚もたまっている。安子は約束に忠実だった。あるいは安子の几帳面な従順さが、直子の反撥をかえって増したのかも知れない。だからなにも、安子とは約束をくり返す必要がなかった。いやもともと、安子はそえものだった。いわば、直子のひがみを恐れた私が、安子を巻きぞえにしたまでである。しかし、肝心の直子は、わずか数日でいともたやすく私との約束を反故にした。そのときの口実がまた、見事だった。

「あんな約束、とても無理だよ。睡眠時間が足りなくて、学校では眠くて仕方がない。折角勉強しても、先生がなにいっているのかわからなくなってしまう。少し考えてくれない」
「お前より二つ年下の安子はちゃんとやっているじゃないか」
「安子は安子、私は私よ。私はね、朝起きるのがとっても早いの。だから安子みたいにはとてもいかない」
勝手ないい分とは思いながら、その度に私は約束の勉強時間をかえた。ところが、余りひんぱんにかえていくうち、日常の生活リズムまで混乱し、ときには安子からこんな指摘を受けた。
「お父さんのいう通りにしたら、夕食は九時すぎになってしまうよ」
それでも私は、娘たちの勉強を、一日少くとも二時間は守らせようと執拗にこだわった。絶えず私の、というより私たち夫婦にまとわりつく不安から少しでも逃れる手立ては、そこにしがみつくしかないように思われたからである。
直子と安子は、ほぼ二つ半のちがいだった。安子は早生れの二月だから、すでに三年生になっている。だが私には、安子についての思い出がびっくりするほど乏しい。いつの間にか小学校にあがり、そしてふと気がつくと三年生にもなっていた、という感じしか持てないのだ。余りに、直子の記憶だけがつまりすぎたせいだろう。しかも、そのひとつひとつが、数ケ月の間、私と妻を震え上がらせたものばかりだった。私は直子の行く末について、妻と語りあかした思い出をいくつも持っている。話がこみいってくると、私はきまってこんな慰め方で、妻の不安をやわらげたものだ。
「そのうちきっと良くなるものだよ。俺もあの頃は似たようなものだったからね」

私がそのうちというのは、三、四年先のことだった。三つの頃は、学校にあがればといったし、二年のとき登校拒否をはじめれば、五年か六年にもなれば落着いてくる、と励ました。五年生は、いわば常々くり返したぎりぎりの年に近づいていた。ところが、その五年になって、直子の日常は、以前にもましてすさんでゆくように思われたのである。

私は次第に、妻と、直子についての話題を交すのが怖くなりはじめていた。それでも、子供たちが寝静まった後での話は、絶えずそこに集中した。どれほど用心深く避けようとしても、いつの間にか、直子が話題の主人公になってしまう。男にだまされた愚かな女の犯罪記事を読めば、成人した直子の像をそこにさぐろうとする。母娘が口汚なくののしり合うテレビドラマがあると、もうテレビなどそっちのけで、その日の娘とやり合った一部始終が妻から持ち込まれる。

「あんなにいい合えたら、どんなにかせいせいするでしょうね。うちじゃ怖くて一言もいえやしない。今朝なんかも、台所が汚いからお母さんのつくったもの食べる気がしないって泣きわめくのよ。とうとうなんにも食べないで学校に行ったわ」

「お前がもっと素直に接してやらないからじゃないのか。たしなめるときはちゃんとたしなめる、それをしないから、かえって不満がつのるんだ」

「いいえ、私にはとうていできません。一言でも口答えしようものなら、そりゃすさまじい暴れ方よ。あなただってわかっているでしょう。おとといだってそう、あなた御自身、がまんしきれずどなったじゃありませんか」

そして、妻への腹いせに、やっと一つ半になった長男の篤史を、思い切りなぐりつけた直子の振舞いが、ことこまかに長々と語られていく。ついには、私も妻につられて興奮し、見境をなく

して直子をののしり出す。数時間も経って、とめどなく広がる虚しさに気付き、お互い黙り込むが、もうそのとき直子は、おぞましい娘となって私たちにへばりついている。これが、私と妻のくり返す日課といってよかった。

その反動からか、私は安子を殊更に美化した。たしかに安子は、親の目から見れば、直子とくらべてすぐれたところが多かった。親にとってなにより気掛りな学校の成績は抜群だったし、私たちのいいつけも良く守った。物事への執着心も、あきっぽい直子とくらべるせいか、少しこだわりすぎるのでは、と思えるほど強かった。今でも、こうした安子の性格を誉めた父の言葉をしばしば思い出す。当時、父は死期が迫っていたが、まだ入学前の安子を四、五日観察しただけで、こう評価してくれたものだ。

「お前は実にいい娘に恵まれたね。ちょっとしか見ていないが、よくわかるよ。こんなに粘り強く集中力を持った子はめったにいない。子供の資質にとって、それが一番大事なものだ」

だからといって、安子が私の期待したほど、すべてに傑出した娘だったかは、かなり疑わしかった。学校の成績を別にすれば、むしろいたって月並な子供かも知れなかった。いやその成績すら、三年生程度の学力で判断すること自体、かえって危険だったにちがいない。父の誉めてくれた執着心も、場合によっては欠点になりかねなかった。二年の三学期だったか、さすがの私もむっとさせられたこんな出来事があった。たしか直子が安子から借りた鉛筆を紛失したのを怒って、直子の教科書を隠したときだと思う。直子がどれほど懇願しても、安子はあくまで返そうとしなかった。ついに直子は泣きわめき出したが、それを見つめる安子の目は実に冷ややかだった。

「今度はすぐ許してやるわけにはいかないよ。これで三本目になるんだから」

「たかが鉛筆の二、三本どうだというんだ。そんなことぐらいで、教科書を隠すなんて卑劣とは思わないか」

そういってたしなめようとした私に、安子の答えはかたくななほどけわしかった。

「お父さんは口出ししないで。これは私とお姉ちゃんの問題なんだから。これぐらいしないと、今に私の鉛筆はなくなってしまうのよ」

それでいて、安子の机には、数十本の鉛筆がぎっしりしまってあった。しかもそのうちの幾本かは、直子が紛失したものだったのである。おそらく安子の性格でなにより鼻についたのはこうした傲慢さだったろう。ずっと幼い頃から、直子を姉としてたてる謙虚さがまるでなかった。すべてに自分の方が勝っている、と思い込んでいたのである。たとえば、ちょっとしたゲームにしても、直子が勝つとひどく不審がった。そして、お姉ちゃんはずるした、といい張り、それらしい理屈を見つけた。事実、三度に一度ぐらいは、安子の指摘通り直子にミスがあった。それが度重なるうち、直子はなにをやっても安子に勝てなくなった。こうなると、直子には、自慢できるものがほとんどなくなってしまう。あえて探せば、身体つきが人並はあったことぐらいだろうか。そういえば、直子の作文にこんな一節があったのを見たことがある。

『妹の特徴はチビだということである。学校で一番のチビだし、近所の一年生と並んでも妹の方がずっと小さい。お父さんはよく、安子はちっとも大きくならない、といってこぼす。……』

でも、ときにはそれすらが安子の自信を増長させたかも知れない。かけっこや跳び箱など、たいていの運動競技で同じ年頃の子供に負けなかったし、大人たちはそのことを不必要にもてはやしたからだ。こうして安子はますます直子をあなどった。だが、そこには多分に、私や妻の醜い

影があったにちがいなかった。

私たちは、無意識のうちに、絶えず直子と安子を比較してきた。安子についてはすべてに安心できるが、直子にはなにかが欠けている。それが私たちにこびりついた評価だった。だから口答えひとつにしても、安子のはほほえましく、直子のそれは無性に腹立たしく感じた。いびつな性格からの反撥、と映ったのである。いわば、直子のあらゆる欠点が裏返しされて安子の美点となり、安子の長所は直子への不満となって拡大した。やがて顔立ちまでが比較の対象となった。

「この頃、安子はとってもいい顔になったと思わない」

「うん。なにかこうきりっとしまった顔になっているね」

「そうでしょう。以前は顔だけは直子の方がずっと愛らしく思えたのに。最近のあの子、眼がつり上ってひどい顔付きになっているわ」

「日頃の落着きのなさが、顔付きに現われているんだろうな」

私と妻は、幾度かこんなやりとりを交した。

こんな差別が、娘たちをどれほど歪めていくか、もちろん私や妻が気付かなかったわけではない。むしろ私たちは、日毎に恐れてさえいた。それでも、安子の欠点には目をつぶり、直子をないがしろにするのをやめなかった。ひきずってきた直子への思い出が重すぎたのである。いってみれば、安子を美化することで、親としてのよりどころが得たかったとでもいえようか。こうして、直子ばかりか安子まで、私たちのなかにできた虚像はどんどんふくらんだ。

私にもう少し直子への思い遣りがあったら、せめて人前で娘たちを話題にするのだけは慎しんだろう。しかし私は、のべつ誰彼の区別なしに喋りまくった。軽率に安子を自慢し、直子を愚弄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.